

No. J2316

民国期、北平における仏教革新運動——仏教と社会との関係に着目して

筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻 一貫制博士課程

何 雨

本研究活動は、清末から 20 世紀 30 年代までの北平（今の北京市）における仏教革新運動を分析することにより、民国期における仏教と社会との関係の実態を考察した。本研究を実施するに際し、中国国家図書館や首都図書館に所蔵している仏教の雑誌資料（既刊）を利用するとともに、北京市档案馆所蔵、南京の中国第二歴史档案馆所蔵の未刊行の档案史料を調査した。また武漢の武昌仏学院に赴き聞き取り調査をした。以上の調査研究によって明らかになったことは以下の通りである。

伝統社会と深刻な分断が現れた清末民国期において、一部の知的な僧侶は仏教の制度、教義に変革を求めた。例えば、北平における観音寺の住職の覺先は、譚嗣同などの維新派人物と深い交際があったため、仏教の旧制を死守するのではなく、時代・社会の変容に順応し仏教の制度を改革し、仏教の社会的有用性を発揮することを唱えた。1927 年、北平に仏教平民教育聯合会を发起した。一般人を対象とする平民学校を開設することを通じて、仏教と世俗社会とのつながりを求めた。

平民教育の振興を目標とした仏教平民教育聯合会のほか、北平仏教会が北平の僧侶・仏教の業務の管理を目指した地域的な仏教組織として、1924 年に成立し、1929 年に中国仏教会に加盟し改組した。仏教と社会との関係に対する認識の違いから、仏教平民教育聯合会と北平仏教会は仏教平民教育・僧侶教育をめぐって見解の相違が生まれた。さらに、こうした理念的な違いから、両会は政治勢力を借りて相互攻撃し、権力闘争までに発展したことは、民国期における仏教改革の進行に支障をきたした。

なお、以上の研究成果を「民国期、北平における仏教革新運動——仏教団体間での対立を中心に」と題として、西安日本学研究会第 41 回例会（2023 年 12 月）で報告した。